

長坂尚登氏 熱く語る

「うそから出たまこと大作戦」

20日に豊橋市内で行われた第363回東三河産学官交流サロンでは、内閣官房地域活性化伝道師の長坂尚登氏と、豊橋技術科学大学総合教育院准教授・中森康之氏がスピーチした。

「僕が考える豊橋創成うそから出たまこと大作戦」と題して話した長坂氏。「マイナス29・3%。この数字が何の

数字かわかりますか」との問いかけから始めた長坂氏。日本創生会議が示した20〜39歳の女性人口の30年後の減少率にちなんで、豊橋市のそれを示した数字なのであるが、「この数字の持つ危機感を持っていきますか」との問題提起である。

そして長坂氏は断言する。「豊橋はおもしろい人が日本一集まるまち」をまことと酒を酌み交わし、まちの将来を語り明かすのです。これって若い人にはすごくうれしいことなんです。リーダーが徹底した「人たらし」なのです」と長坂氏。

豊橋を日本一おもしろいまちに

と(本当)にしたいと。「地方創生でとりあげられる御三家がある。長野県小布施町、島根県海士町、徳島県神山町の3つである。なぜこれら3つのまちに人が、特に若い人が集まってくるのか。3つのまちの共通点は、町長が若い人を大切に扱ってくれること。若者

科学者の養老孟司氏と世界的建築家である隈研吾氏との対談内容を紹介する。「若い人たちが今移るところは、ただの田舎じゃないんです。年寄りのいない田舎なんです。若い人にとって、年寄りって邪魔なんです。だって年寄りは既得権を持っているんですよ。田舎っていうのは、一次産業がなきゃやっていけないところなのに、畑のいいところは全部年

みが田舎にはある」と。もう一つ紹介したのは最近、豊橋に移り住んだ人が最初に表明した言葉。「何があっても死ぬまで豊橋で生き抜くことを決めている。この

地に骨を埋める覚悟ができていない」という宣言を聞いて衝撃を受けたという。「豊橋ってこういう覚悟がないと、移住できないまちなんです。豊橋がこういう田舎であっていい



のですか」と齒に衣(きぬ)着せぬ問題提起が続く。そして、まちづくりの相談を通じて、学生や若者はにぎやかになるまちづくりを考えるが、商店主と若者の接点がちづくりのベースになっていることを強調し、「若い人を立てて誰もやってないことをやって、豊橋をおもしろい人が日本一集まるまち」にしよつではありませんか。最後の言葉が館内に響いた。

(伊藤秀昭)